

開国期の日本を伝える英米人の 日記及び日記的述作

佐 野 英 一

本篇は前稿「初期訪日英人の日記」のあとをうけたその続篇である。

1673 年英国東印度会社の派遣船 Return 号が日本との交易を許されずに空しく帰ってから、1853 年アメリカの Commodore Perry が艦隊を率いてやって来るまでの 180 年間は、アングロサクソン人で日本に関する日記もしくはこれに類似の記録を作ったものがあることを聞かない。この期間に、日本の事情を西洋に伝える記述を残したのは、主として、オランダ人に雇われて出島に來た他の欧州大陸人たちだった。すなわち、ドイツ人ケンプエル (Engelbert Kämpfer, 1651—1716, 在日 1680〔元禄3〕年9月23日—1692年10月31日)、スウェーデン人テュンベリ (Karl Peter Thumberg, 1743—1828, 在日 1775〔安永4〕年8月13日—1776年12月3日)、ドイツ人ジーボルト (Philipp Franz von Siebold, 1796—1866, 在日 1823〔文政6〕年8月8日—1829年12月30日)* の三人、いわゆる「出島の三学者」と呼ばれた人たちであった。このうちジーボルトは 1859 年 8 月にも再訪して、開国の前後に跨がる人であるから、前二者が長いあいだ、西欧人にとって日本を知るよすがとなった。ケンプエルの本はドイツ語版からの呉秀三医学博士の訳が「異国叢書」に「ケンプエル江戸参府紀行」上下2巻 (昭和3年、4年、畠南社刊) としてある。テュンベリの本は原名を *Resa uti Europa, Afrika Asia, förrättad åren 1770—1779* (=Travel abroad in Europe, Africa and Asia, performed in the years 1770—1779) と言い、L. Langlès の仏訳 (1776) から、日本に関する部分だけの邦訳が故山田珠樹教授によりなされ、同じ叢書中に「ツンベルグ日本紀行」(昭和3年)として出版されている。

「人口論」(*An Essay on Population*, 1798) の第2版 (1802) で、マルサス (Robert Malthus, 1766—1834) は自己の理論である人口自然増加の阻止力 (checks to population) を世界各地の国民について例証している。日本のことは中国の状況を長々と述べたあとに、ほんのちょっぴり附けたりのように書いてあるが、そこでも Thumberg と Kämpfer を引合いに出している。(Everyman's Library 版 Vol. I, pp. 137—8.)

* 著書名は *Nippon, Archive zur Beschreibung von Japan* (1832).

テュンベリの日本の報告の序文を読むと、日本人は非常に幸福に豊かにくらしていると言われるから、そのような国の人口増加阻止力を突きとめることは甚だ困難であるかのようなのだ。しかし、彼の本の先を読むとテュンベリは序文から受ける印象をみずから否定してしまう。そしてケンプェルの著わした貴重な日本誌のなかでは、これらの阻止力は十分に明白である。(中略) 日本人は中国人よりも遙かに戦争好きで、治安妨害的で、不品行で、野心的であるという点で中国人とはちがう。ケンプェルの報告から見ると、中国人の間で嬰兒殺しがしている人口増加阻止は、日本人にあっては、性に関する風習上の不品行が一層多いこと、また戦争と内部紛争が一層頻繁であることによって取って代られているようだ。病気と飢饉からくる人口増加の積極的阻止に関する限り、この両国民はほとんど同一水準にあるように見える。

その他、後に取扱う「エルジン伯支那日本使節記」でも、Alcockの「大君の都」でも、この二人のオランダ商館付き医官の著作は、しばしば言及され、典拠とされている。

英米の古い文学作品で、そのなかに日本が出て来る、比較的早いものは、英国ではデフォウ(Daniel Defoe, 1661?—1731)の「ロビンソン・クルーソー」(1719)と、スウィフト(Jonathan Swift, 1667—1745)の「ガリヴァーの旅行記」(1726, '27)、アメリカでは、もっと降って、メルヴィル(Herman Melville, 1819—91)の「モウビー・ディック」(1851)であろう。

「ロビンソン・クルーソー」の第2部(*The Further Adventures of R.C.*)の終りのほうで、謀叛した水夫から事情を知らずに船を買いとったために自分らが海賊と思われてしまった主人公とその相棒とは、南京の近くのQuinchangへ逃げて来る。——ここで、手帳を失くしたからこの地名の綴りは怪しいが、とクルーソーすなわち著者は逃げをはっている。——そして、この地で積荷の商品を買ってくれたのが日本商人(Japan merchant)で、いっそのこと船も買ってくれぬかと持ちかけると、日本人は、もうこの上船までも買う金がないが、一度日本へ来て、マニラまで航海して来たらそのあとで買ってもよいと言う。

ところで、私はそれでもその提案を承認して、自分で行くつもりだったが、私より賢い私の協同者は、海上並びに日本人の危険を述べて、私に思い止まらせた。日本人は偽りの多い、残酷な、危険な国民であり、それから、フィリッピン人のスペイン人はそれに輪をかけて偽りが多く残忍陰險だったから。(textはEveryman's Library版 p. 405.)

ガリヴァーは第3篇の終りで、日本にちょっと立ち寄ることになっている。

1709年5月6日、[ラグナグ王]陛下及びすべての友人たちに厳やかに別れを告げた。(中略) 六日たつうちに日本へ自分を運ぶ船の準備ができ、航海に十五日かかった。日本の南東側にあるXamoschiという小さな港町に上陸した。この町は西に出た岬に位し、北の方長い湾へ通ずる狭い海峡がここにあり、その細長い湾の北西部に首府の江戸がある。

日本はラグナグ (Luggnagg) 国という島国の北西に在ることになっているのである。この Xamoschi を豊田実氏は「下関」の聞きかじりだと推定されている由であるが、瀬戸内海と東京湾とを一緒にして考えれば、いかにもこれは下関でもある。ガリヴァーは踏絵は寛大な処置で許してもらい、6月9日長崎 (Nangasac) に着き、オランダ船に投じて 1710 年 4 月 16 日に英本国の the Downs の錨地に帰着する。

この *Gulliver's Travels* はガリヴァーの従弟 Richard Sympson なる者がガリヴァーの書いたものを纏めて出版するという形式になっているのだが、その Richard Sympson の署名のある “The Publisher to the Reader” と題した序文のなかに

もし私が、これら数回の航海中の偏差や方位はもちろん、風向、潮流等に関するくだり、また、暴風中の船の処理の水夫用語で書かれた詳細な記述、さては緯度経度の報告などを、大胆に省略してしまわなかったら、この本は二倍の大きさにもなったであろう。

という文句がある。これは実際 Saris の航海記などを読んだものには、まことにびったり来る言葉である。スウィフトは 18 世紀の初めに、ありもしない Luggnagg 等の島を想定して、今の眼からは甚しく笑うべき空想としか見えないのであるが、これよりずっと後の 1804 年に、ロシア使節レザノフを乗せ、仙台の漂流民 4 名を送還して長崎にやって来たクルーゼンシュテルン (Krusenstern, 1770—1846, 在長崎 1804 年〔文化元年〕10 月 8 日—1805 年 4 月 8 日) の「日本紀行」* (羽仁五郎訳, 上下二巻, 「異国叢書」昭和 6 年) を見ると、このロシアの老練高邁な海将は、日本の東に島があると思ってやって来ている。(同書, 上巻, p. 112 参照。) この一事をもってしても、「ロビンソン・クルーソー」や「ガリヴァー旅行記」は、発表当時は大人にもまじめに取り上げられる面白い傑作であったことが想像されるのである。

メルヴィルの「モウビー・ディック」に現われる日本は、同書の第 110 章、第 117 章あたりである。白鯨を追う鬼と化したエイハブ (Ahab) 船長の乗船ピークォッド (Pequod) 号が地球を一廻りして日本近海に近づくからである。しかしこれは、調子の高い美しい文章だが、海上から日本を遠く眺めただけの言及である。

アメリカの東岸 New England の Nantucket や New Bedford を中心とした捕鯨業は、ちょうどこの頃が最盛期であった。南北戦争になるとこれらの捕鯨船は南軍の海軍のために潰滅してしまい、平和にかえった時には廉価な重油が出るようになって鯨油の需要がなくなり、昔日の盛観にはもはや帰らなかつ

* 原著のドイツ版名は *Reise um die Welt* (1810—12)。

た。1859 年の 9 月から 10 月にかけて新開港場函館を視察した Alcock の文中に、「このすばらしい良港に商船がたくさん入り、外国貿易がさかんに行われるようになるかどうかを今予言するほど大胆なものは誰もいない。現在は主として捕鯨船に使用されている。前年中に 30 隻が入港し、そのうち 29 隻はアメリカ船、1 隻がフランス船で、イギリス船は 1 隻も無い。」とある。(The Capital of the Tycoon, Vol. I, p. 277.)

この時期の日本を書きとめた英文日記には、純日記('pure diary')としては米国の Dr. James Morrow (1820—1865) のものと、米国最初の総領事として下田に来、のち初代公使として江戸に出た Townsend Harris (1804—1878) のものと、二つしか発表されているものは無いように思う。だが、ほかに、もう少し日附けを多く書いてくれたらそのまま日記になりそうな本、つまり、準日記とでも言える本で、どっしりしたものが二三ある。それは「ペリ提督日本遠征記」(Matthew Calbraith Perry: *Narrative of the Expedition to the Chinese Seas and Japan*, performed in the years 1852—1855. 3 vols. Washington, 1856) と、Laurence Oliphant 著の「エルジン伯支那日本使節記」(*Narrative of the Earl of Elgin's Mission to China and Japan*. 2 vols. London, 1859) と、開国後の英国駐日初代公使 Sir Rutherford Alcock の「大君の都」(*The Capital of the Tycoon: a Narrative of a Three Years' Residence in Japan*. 2 vols. London, 1863) である。私はこれらを一括して年代順に説明して行こうと思う。

1. Perry の「日本遠征記」

4 冊本が最初の版なのだそうだが、私が見たのは 3 冊本であり、第 3 巻は専門的な調査報告と、日本の魚類、植物、機具、海洋学上などの附図である。初めの 2 冊、すなわち、遠征記そのものは、岩波文庫で四分の三まで訳が進んでいる。

1852 年 11 月 24 日に Virginia 州の海軍基地 Norfolk を、蒸汽船 Mississippi 号が、日本の門戸を強引に開かせる使命に向かって出発する。これには、米国海軍の事業としてもっと多数の船が加わる予定であったが、色々の都合で準備がおくれ、待ちきれなくなった Commodore Perry (本名 Matthew Calbraith Perry, 1794—1858) は、単艦をもって出発したのであった。

この遠征行に参加する成員はすべて自己の日記その他の記録は一切海軍当局に提出し、そのコピーも許可があるまでは公表してはならないという命令が出された。かくして確保された書類は、帰国後ペリーの命を受けた Francis L. Hawks の監督下に整理編集され、米国議会の命令により出版された。本書の材料となった書類のうちの日記だけの筆者をあげると、ペリー自身のほかに、Adams 海軍中佐、後任副官 (flag-lieutenant) Contee 及び Bent, 主計官 Harris, Perry という提督ペリーの秘書、Bayard, Taylor, 海軍牧師 Jones だと、同書は、良心的なペリーの注意により、明記している。

Early on the morning of the 2nd of July, 1853, after many unforeseen delays, the Commodore departed from Napha with four vessels only, the two steamers, the *Susquehanna*, his flag-ship, and the *Mississippi*, the *Saratoga*, and the *Plymouth* sloops-of-war. The Supply was left behind, and the *Caprice* dispatched to Shanghai. This was but a poor show of ships, in comparison with the more imposing squadron of twelve vessels which had been so repeatedly promised. But as none of these additional vessels had arrived, and as no calculation could be made as to when they might be looked for, the Commodore resolved to sail with the inferior force, which he trusted would so far answer his necessities as not to interfere seriously with the great object of the expedition, now fairly set out for Japan. The advantages of steam were fully appreciated in the opportunity it gave of making a uniformly steady and direct course of ascertained speed—advantages in which the sailing vessels were made to participate; for the *Saratoga* was taken in tow by the *Susquehanna*, as the *Plymouth* was by the *Mississippi*. The Commodore's ship led the van out of Napha and awaited, some five miles away, between the group of islands situated off the harbor and the southwestern extremity of the island, the coming up of her consort, as did the *Mississippi* for hers. Hawsers then being passed from the steamers to the two sloops-of-war, they were respectively taken in tow, the squadron fairly started and began the voyage to Yedo.

— Vol. I, pp. 228—9.

(1853年7月2日の朝早く、多くの予見されざりし遅延ののち、提督はただ4隻をもつて、すなわちサスケハナ号——これが彼の旗艦——及びミシシッピ号の両蒸汽船と、サラトガ号、ブリマス号の両スloop艦とをもつて那覇から出発した。サブライ号はあとに残され、キャブリース号は上海に派遣された。あれほど繰返して約束されていた12隻から成るべかりしもっと堂々たる艦隊に比べれば、これはまことに貧弱にしか見えないうる船群ではあったが、附加されるべき艦は到着せず、いつまで待てば来るのか見当もつかぬ有様であったから、提督は劣勢をもつて出航を決意、これだけでも、今やいよいよ日本に向かうことになったこの遠征の大目的に重大な支障を来たさない程度には彼の必要に副いうるだろう、と彼は信じたのだった。確実にわかっている速度で均等に絶えず、真っすぐに進航するという、この時得られた機会において蒸汽力の利点は十分に利用された——帆走艦もこれに与かったところの利点であった。すなわちサラトガ号がサスケハナ号に曳航され、ブリマス号はミシシッピ号に曳航されたのだ。提督の船がまず先頭を切つて那覇港を出、港外の沖にある島嶼群と本島の南西端との間の、約

5 裡行ったところで僚艦の来着を待ち、ミシシッピ号もその僚艦を待った。次いで大綱が蒸汽船から 2 隻のスループ艦に渡されてそれぞれ曳かれ、艦隊はいよいよ発進、江戸への航海を始めた。)。

当時は、Trafalgar の海戦の頃以来、否、大ざっぱに言えば、Elizabeth 朝のスペインの無敵艦隊以来あまり変らないで長くつづいていた帆船海軍時代から、蒸汽力と爆発砲弾 (explosive shell) と——それ以前は砲丸 (solid shot) だった——船体の装甲とを用いた近代的海軍へ移行し始めの過度期であった。だから上記のごとく蒸汽船と帆走船との混合艦隊である。

蒸汽機関を用いた船は既に 1819 年に大西洋を横断していたのだが、海軍の専門家はなかなかこれを信用せず、1860 年ごろになっても、機関や機械は故障を起し易く、いつ何とき使えなくなるかも知れないから長い航海にはマストと帆は是非必要だと考えられていた。したがって、Norfolk を出発したペリーの乗った Mississippi 号も、喜望峰に向かってゆく途中、時どき水掻き板を上げて——当時はまだ screw 船ではもちろんない——風力だけで航行した。貯炭所がそう方々にないということも一つの理由となったであろう。また、セントヘレナ島にナポレオン幽囚の地を見物したあと、英国が防備を施している同島を去らんとして、この島は帆船海軍には難攻不落かも知れないが、蒸汽船でなら攻め落せる、などとペリーは考える。彼の日記にそれが書かれていたので、本書では「提督はこう思った」などとして、そんな感想が現われるのである。

ずっと初めのほう (Vol. I, p. 77) で、ミシシッピ号とともに出発する予定であった船名を並べたなかに、Vermont, 74 とあるが、この 74 は旧式海軍の艦種の名で、「砲 74 門搭載艦」の意なのだが、日本訳は、日本の「第……何々丸」式に、同名の船の何代目を示した数字と誤られている。

The following morning (July 15) a surveying party was again, at a very early hour, dispatched by the Commodore to sound further up the bay [of Yedo].... On the return of the ship's boats from sounding, all the officers and men were in raptures with the kindly disposition of the Japanese and the beauty of their country. In fact, nothing could be more picturesque than the landscapes wherever the eye was directed, and even those on board ship never tired of looking at the surrounding shores. The high cultivation of the land everywhere, the deep, rich green of all the vegetation, the innumerable thrifty villages embowered in groves of trees at the heads of the inlets which broke the uniformity of the bay, and the rivulets flowing down the green slopes of the hills and calmly winding through the meadows, combin-

ed to present a scene of beauty, abundance, and happiness, which every one delighted to contemplate.

— Vol. I, p. 267.

(空朝(7月15日)一つの測量隊が再び、極めて早い時刻に、提督によって〔江戸〕湾の更に奥を測深すべく派遣された。(中略)船の短艇が測深から帰ってくると、士官も水兵も日本人の親切な気立てと彼らの国の美しさに、みんな大よろこびだった。じっさい、眼をどちらに向けても見える風景に優って絵のように美しいものはありようがなく、船上の者どもすら周囲の岸をあかず眺めるのだった。いたる所の土地の高度の耕作と、生えている植物すべての翠緑と、湾岸の均等を破る入江の鼻にある木立ちのなかに休まって繁榮する無数の村落と、山の緑の斜面を流れくだり草地のなかを静かにうねりゆく細流とは、相俟って、誰もが眺めて惚れ惚れするような美と豊富と幸福の情景をつくり出していた。)

工場一つない当時の東京湾の夏の美しさを想像して頂きたい。これは浦賀沖でなくとも、江戸のすぐお膝もとの海岸でも同様であったことは Oliphant の本の第2巻108頁にある挿絵——いずれは何々河岸とも呼ばれる landing-place であったであろうが、その一枚の小さなカットがよく示してくれる。

やがて完訳される本書の内容についてはこれ以上多くを引例する必要はなかろうと思うが、この報告書が、何々調査団報告書といったたぐいの無味乾燥なものとならず——その要素ももちろん兼ねてはいるが——ゆく先々の見物など詳細に記述され、面白い読み物となっているのは、多くの人の日記から作られたという事情に負うところが多いであろう。アフリカの Mauritius 島では、フランスの初期ローマン派の名作小説「ポールとヴィルジニ」(Paul et Virginie, 1787, 作者は Bernardin de Saint-Pierre, 1737—1814)のモデルとなった同地の事件を記し、且つ、熱海のお宮の何とか式に、後日一英人が私邸内に造ったポール、ヴィルジニ兩人の墓を訪問、今こんなものを金を取って見せるなどはけしからぬと憤慨した記事もある。吉田松蔭の渡米失敗もそれと名は出ないが、記録されている。

2. Dr. James Morrow の日記

Morrowは米国 South Carolina 州の医師で、植物学に造詣が深く、農学者としてペリーの遠征隊に中途から加わって日本に来了。農耕の状態を調べ、種子や植物や農具の見本を持って帰り、向うから持って来た機具などを備えつけて見せる役目だった。その日記兼報告は当然「遠征記」中に融合せしめらるべきものだったが、提出がおくれて間に合わなかったものである。ごく最近 *A Scientist with Perry in Japan*, edited by Allan B. Cole (Univ. of N. Carolina Press, 1947) として出版になった。日記の期間は、途中が抜けているが、Feb. 26, 1853—Nov. 10, 1854 で、“Eighteen Weeks in Nippon”と題された

Part III, 日にして Feb. 11—June 25, 1854 が日本に関する部分である。

May 9 th,... While passing through the village of Simoda we saw more of the licentiousness and degradation of these cultivated heathen than we had seen before. It is common to see men, women and children, —old and young, married and single—bathing in the same large open bath house.

May 10 th, I learned this morning that the iron implements were stopped yesterday, because there were several pieces of cutlery in the lot. The black smith [*sic.*] told me that it was the standing law of Japan not to sell any kind of cutlery to foreigners,—and that he escaped narrowly getting into trouble. I knew that Golownin and his men could not procure any because it was thus prohibited, but had hoped that the law might be changed in our favor,—and the smith seemed to think so also. I procured privately the specimens of iron ore and paid for them by a sleeve present, as they call it. In other words, I took the ore which was placed in my reach, and dropped its value into his sleeve.

This mode of procuring articles of interest is of doubtful propriety, and I hesitated and refused several times, before practising the evasion. But they showed us how to do these little tricks daily, and amused us by the dexterity with which they can perform them without any assistance on our part, and without detections though the worst spies be present. Another mode of evasion is openly to make you a present of what they think you would like, and refuse utterly to take any present in return at this time,—but the next day or some time after, a present will be received without any hesitation. But it is more acceptable if given in the sleeve or privately.

— pp. 175—176.

(5月9日, (前略) 下田の村を通り抜ける間に, これらの教養ある異教国民が持つ淫蕩さ, 墮落のさまを, 以前に見たよりも多く見た。男も女も子供も老若, 既婚未婚を問わず, 同一の大きな開放的な浴場で湯につかっているのを見るのは普通のことだ。

5月10日。買物のなかに鉄器が数個あったがために鉄を使った道具がきのう差止められたことを, 今朝知った。鍛冶屋は刃物類は外国人には売ってはならぬというのが日本の現行法である,—自分はまだ少しでひどい目にあったところだったと私に言った。ゴロウニンとその一行の人たちがこのような禁令があるために刃物が少しも得られなかったことは知っていたが, この法律はわれわれのためには変えられるものと思っていた—鍛冶屋もそう思っているらしかった。私は鉄鉱石の標本を密かに手に入れ, そ

の値段の支払いを、彼らのいわゆる袖の下でした。つまり、私の取れるようなところに置かれた鉄鉱石を取って、その価格を彼の袖の中に落しこんだ。

興味ある品物を調達するこの方法の正当性が疑われるので、私は躊躇して再三拒んだのちにこの法律回避を実行した。しかし彼らは私たちにこの小さなごまかしの仕方を毎日教えてくれ、またわれわれの方で少しも手助けをしなくても、どんなにひどいお目付が居ても、露顕することなしにやってのけ、それがひどく巧妙なのでわれわれは面白かった。もう一つの回避の方法は、君がほしいと思っているだろうと思うものを君に公然と進呈し、その時はその返礼の贈物を断然受けとらないというやりかたである——しかし、翌日や、その後のいつかに、贈物は躊躇なく受とられるのである。しかし贈物は袖の下から、すなわちこつそりと出した方が一層よろこばれる。）

しかし、この *Morrow* 博士の日記は、どちらかと言えば平凡な日記で、文も冴えず、面白い個処は僅かである。挿絵にはベリーの本の色刷りの一部が写真版にして利用してある。*Morrow* は帰国後、南北戦争で南軍に加わって戦った。

本書の巻末の *Notes* から、この当時のアメリカ人の日本関係の日記が、まだ未刊行のままで数種あることがわかる。

3. *Townsend Harris* の日記

初期訪日英人の日記中であって *Richard Cocks* の日記が純日記として占めるすぐれた地位を、開国期以後のものの中に占めるのがこのハリスの日記である。しかし人物はハリスのほうがはるかに上であって、彼には哲人、高士といった面影がある。これも今は文庫本に完訳があるから、ここでは私が一読の際、ノートに書き抜いた特徴的な個処を少し示そう。ハリスは時に、次のような自然観照者となって現われる。

Tuesday February 19, 1856. Up at daylight to see the beautiful changes of light and shade produced by the rising sun; indeed, it is a constant source of enjoyment to watch the effect of those changes during the day; now, the light cloud, passing quickly over the sun, seems to *race* down the mountain, across the plain, across the water over to Province Wellesly; where now it darkens for a moment the golden paddy fields—next seems to deepen the green of the canes growing on the various sugar estates. Next dark masses of clouds rise up over Elephant Mountain. The leaden color of its advanced edge does not leave you in doubt for a moment as to its nature—it is a thunder squall. Soon the vivid lightning begins to dart out—next you hear a faint mutter of thunder; the cloud hurries on; the lightning plays

incessantly; the crash of the thunder is distant; you see the curtain formed by the falling rain, down to the tops of the palm trees at a distance of twenty miles—on it comes—now the tall white chimneys of the sugar boiling houses are shut out—now it strikes the shipping—the town—the plain—palm trees and houses are shut out from view. You hear a low sound like an angry roar and it has reached the hilltop. You are in the cloud itself. What blinding lightning—the roll of the thunder never ceases. It continues half an hour, an hour, or three hours, and then the clouds roll away to the southeast and the sun comes out once more. In all parts of the tropics the thunder is heavy and the lightning vivid, but I never saw such grand displays of God's pyrotechnics as I have seen at Penang. On one night that I was on the hill, the storm lasted six hours. It was the most magnificent sight I ever witnessed. I saw on that occasion what indeed I have seen since, the descending stream of lightning, divided into a great number of lines and curved around and upwards, forming an "inverted weeping willow."

(1856 年 2 月 19 日、火曜日。昇る太陽によって生ずる光と影の美しい変化を見んがために夜明けとともに起床。じっさい、屋のあいだそのような変化を見つめることは絶えざる喜びの源泉である。今や軽い雲が、すばやく太陽を遮り過ぎ、山を走りくだり、平原を横切り、水を横切り越えてウェルズリ州へとやってゆくように見える。そしてそこで、今度は一瞬、黄金色の水田を陰げらす。次いで方々の甘蔗畑に生える甘蔗の緑を濃くするようだ。次に、黒い雲の塊りがエレファント山を捲って立ちのぼる。その先端の鉛色によってもはや一瞬も、それが何であるか疑念の余地がない——雷のスコールだ。間もなくピカピカ光る稲妻が突っ走り始める——ごろごろとかすかな雷鳴が聞こえる。雲が走りだす。稲妻はさかんに飛ぶ。ガラガラッと雷の落ちる音が遠くです。降りそそぐ雨のカーテンが見える。雨は二十哩向うの椰子の木ずえに降っているのだ——いよいよやって来る——もう甘蔗煮沸場の高い白い煙突が遮られる。今やそれは船舶を襲う——町を——平原を——椰子の木と建物が見えなくなった。怒った咆吼のような音響がして、それは山の頂に達した。今や身が雲そのもののなかにある。何という眼もくらむような電光だろう——雷鳴はいつまでも止まない。半時間、一時間、否三時間もつづいてから、やっと雲が南東に去り始め、太陽がまた出てくる。熱帯地方ではどこでも雷は激しく稲妻は強いのだが、自分がピナンで見たほどの壮大な神の花火製造術の展示を見たことがなかった、山上にいた或る晩などは、あらしが六時間もつづいた。今まで目撃したことがないほどすばらしい眺めだつた。あの時あれを見たのが始めてその後もしばしば自分は見た、流れ下る雷光が幾条もの線にわかれ、周囲と上方に曲線を描いて「逆さまにした枝垂柳」になるさまを。)

次のようにユーモアにも欠けてはいない。

Monday, June 30, 1856. Still enjoying the delicious weather on the Praya Grande at Macao. Heard a story of a countryman who commanded an American clipper loaded for London. While going down the China Seas, his dearly beloved wife died. He did not like to let the fishes feed on her. He was a temperance man and had no spirits on board. What to do?

On reflection he remembered he had some *cassia oil* on board. The recollection inspired the man! He procured a large water cask in which he *headed up* the remains of his dear wife, and then *filled up the cask with cassia oil*! It was worthy of the best days of Egyptian embalming. His triumph in cheating the fishes assuaged his grief for his loss, and he ate a hearty dinner. The man was consoled. On his arrival in London, he went at once to the consignees of the oil, and like an honest man told them what he had done and asked, "What's the damage?" In reply he was told £1,000!!!! He was near joining his truly *dear* wife. It appeared that the oil had from various causes been very high in China and had come to an excellent market in London. In the end he paid £900, \$ 4,500.

It is said that he then drew forth the remains of his wife and had her buried in London. And it is *also* said that he carefully put up the oil *in its original jars* and took it home with him to America, where per adventure it is now being consumed in various shapes.

(1856年6月30日、月曜日。まだマカオのプラヤ・グランデで快よい天気をたのしんでいる。ロンドン行きの荷物を積んだアメリカの快速帆船^{クリッパ}の船長をしていた或る同国人の話聞いた。支那海を航行中彼の最愛の妻が死んだ。彼は愛妻を魚に食わせるにしのびなかった。禁酒家だったからアルコールは船上にない。はてどうしたものだろう。

考えた末、船上にカシア^{トンキン}(東京肉桂)油があるのを思い出した。そう思いつくこの男に名案が浮かんだ! 一つの大きな飲料水用樽をとり、その中に愛妻の遺体を詰めると、樽をカシア油で充たしたのだ! エジプトのミイラ製造の最盛期もかくやとばかり。魚族どもの鼻をあかしてやったよろこびに彼の妻を失った悲しみも和らぎ、晩めしはうまく食えた。この男の心は慰められた。ロンドンに到着すると直ちに油の荷受人のところに行き、正々堂々と自分の所業を告白、「損害賠償はいくらか」とたずねた。その答に曰く、千ポンド! 彼はもう少しで、ほんとに dear な妻のところへ昇天するところだった。あの油は種々な理由から支那で非常に高価で、ロンドンでもいい値に売れるものらしかった。結局彼は 900 ポンド、4,500 ドルを払った。

なんでも、それから彼は妻の遺体を引き出してロンドンで埋葬したということだ。それからまた、油はていねいにまた元の瓶につめてアメリカへ持って帰ったという話

でもある。アメリカで今ごろそれは色々な形となって消費されているだろう。)

この日記のなかでわれわれ日本人にとって最も有名な一節は 1856 年 9 月 4 日の記入で、その前半は今下田の玉泉寺の記念碑に刻んである。数年前「英語研究」(昭和26年4月号)に出た、私の旧訳を再録させてもらえば

一八五六年九月四日 木曜日。興奮と蚊のためによく眠れなかった。後者は形がひどく大きい。午前七時、余が旗竿を立てんが為に水兵ら上陸し来る。仕事は困難にして、進捗遅々。円材倒れ、横桁を折る。幸にして負傷者無し。遂に艦上より増援を得、旗竿立つ。水兵らその周囲に円陣を造り、而して、この日午後二時半、余はこの帝国内に於て見られ得し「最初の領事旗」を掲揚す。厳肅なる反省をしてみる——変化の前兆——疑もなく結着のつくに至る発端だ。借問す、真に日本の為になるや否や? 五時出帆のサン・ジャント号は艦旗をさげて余に敬礼し、余はこれに答礼。かくて同号は余を「余の榮譽の中にただ独り」残した。あまり悲しくも感ぜず。蓋し余は突に荷物を解き食物と蚊帳とを探し出すに忙しく、落胆していることを思いとまもなかったのだ。午後八時就寝。よく眠る。

この「余の榮譽の中にただ独り」のところ、原文で“alone in my glory”とあるのは、英国の Charles Wolfe (1791—1828) の名詞 *The Burial of Sir John Moore at Corunna* の最終行から来ている。戦いには勝ったが戦死した指揮官の遺体が部下により敵地に慌しく葬って残されるのを歌った文句である。身に寸鉄を帯びず、ニューヨークで雇って来たオランダ人秘書 Hewsken と、1 人の中国人コックと、ただ 3 人で踏みとどまり、去りゆく自国の軍艦を見送る時の胸中の思いが、僅か 4 語の引用句にこめられていると見なければならぬ。彼には文学的教養も相当にあり、来日途上の船中では Kingsley の小説などを読み、De Quincey (1785—1859) の娘らしい婦人が乗っているといって、興味をもって書きとめている。

4. Oliphant の「エルジン伯支那日本使節記」

のちに小説も書き、従軍記者などもした Laurence Oliphant (1829—88) は、英国の外交官 Earl of Elgin (1814—1867) の秘書であり、主人の中国及び日本での外交活動を書き綴ったのがこの本である。日本の部分は第 2 巻の 1 章から 12 章まで、期間は 1858 年 8 月 3 日から同 26 日までである。下田が 8 月 10 日、江戸の沖に投錨が 12 日、上陸が 17 日、そして 26 日は日英条約に調印した日である。当時英国は中国に深く事を構えていたから惚惚として帰ってゆく。江戸にいたあいだに滝のある王子(‘Hojee’)に案内されたり、川崎の大日如来(‘Dai Cheenara’)や浅草を見物してゆく。文章は軽妙な名文で、この種のものとしては驚くほど readable な本である。Oliphant は次の Alcock 公使のもとに書記官を勤め、浪士の公使館襲撃の際その兇刃に負傷する。

At the head of the Bay of Simoda, and about a mile distant from the town, is situated a pleasant grove of trees. Its mysterious shades are dedicated, doubtless, to religious purposes, and conceal in their solemn recesses some picturesque old temple, in which, for an untold number of years, shrivelled priests have performed their sacred functions. It is a spot eminently suggestive of repose and religious retirement; and we could scarcely believe our eyes when, on bringing our telescopes to bear, we distinguished, fluttering among the leaves of a sacred Bo tree, the well-known combination of red, white, and blue which forms the national flag of our Transatlantic cousins. Yet so it is : the stars and stripes wave proudly over the premises originally occupied by some recent incarnation of Buddha; and Mr Harris, the American Consul, has converted the shrine of that divinity into a four-poster. We learn all this from Mr Hewskens, Mr Harris's Secretary, who comes off to visit us before we have had time to land, and who brings Lord Elgin an offer of services on the part of the American Consul.

— Vol. II, pp. 72—73.

(下田の湾頭、町から約1哩のところに、快よげな森がある。その神秘的な緑蔭は、いづれは宗教的目的に捧げられていて、その厳やかな奥まったところに、何か絵のように美しい古寺院をかくしているのだろう。そしてその寺院では、萎びたような老僧らが、数えもならぬ年数の昔から、彼らの神聖なお勤めをして来たのであろう。極度に休息と宗教的隠退とを暗示する場所なのだが、われわれが望遠鏡を向けてみると、聖なる菩提の木の葉のなかに、われわれの大西洋の向う側のいとこたちの国旗であるところの、有名な赤、白、青の組合せを発見したとき、われわれはほとんど眼を信ずることができなかった。しかも実際そうなのである。星条旗は、もとは仏陀の最近の化身に占められていた境内に誇らかにひるがえる。そしてアメリカ領事ハリス氏はその神の祠(ほくら)を四柱寝台に換えていた。われわれはこのことをハリス氏の秘書ヒュースケン氏から聞き知った。ヒュースケン氏はわれわれがまだ上陸するいとまのないうちから訪ねて来、アメリカ領事が何かと助力を惜しまぬ旨の申出をエルジン卿にもたらした。)

They had been for eighteen months without receiving a letter or a newspaper, and two years without tasting mutton—sheep being an animal unknown in Japan. Still this exile had not the effect of disgusting them with the country of their banishment. Mr Harris spoke in terms even more eulogistic than those universally employed

by the Dutch, of the Japanese people. His residence among them, under circumstances which compelled him to form intimate relations with them—for they were his only companions—only served to increase his high opinion of their amiable qualities and charming natural dispositions. He told us numerous anecdotes illustrative of this, more especially of the extraordinary attention shown him by the Emperor and Empress on the occasion of a serious illness which he had suffered. The Emperor insisted on sending him his own medical man to attend upon him; while her Majesty delighted in providing him with culinary delicacies, prepared by herself, and, suited to his state of health.

—p. 74.

(過去 18 カ月間手紙も新聞も受けとらず、2 年間羊肉を味わったことがなかった——羊は日本では知られない動物である。それでもこの流謫は、彼らに自分らの追放されている国を嫌悪せしめる効果はもたなかった。ハリス氏は、オランダ人がおしなべて使うよりもっと褒めた言葉で日本人を語った。日本人と親密な関係を持たざるを得ない——彼らだけしか相手はなかったから——ような状況下に彼らのあいだに居住したことは、日本人の愛すべき美質と魅力ある生来の気性をますます高く評価させるに役立つばかりだった。これを例証する数々の逸話を彼はわれわれに告げ、且つ、とりわけ、自分が罹った重態の病気の折り、皇帝皇后〔將軍夫妻〕によって自分に示された格別の注意について語った。將軍は強いて自己の侍医を送って彼に侍らしめ、將軍夫人は手ずから調製した、彼の健康状態に適するような御馳走をよろこんで提供された。)

下田にも長崎のようなバザーがあって、そこで外人の買物は次のようになされる。

As soon as the article is determined upon, the Japanese vendor hands you a slip of paper and a fine hair-brush dipped in ink. On this you write your name and the price, after which you convey the simplest expression of which your name will admit, to the Japanese, who writes in his own language the nearest approximation which his ear retains of the uncouth sound. At the end of the day you proceed to a sort of bureau, where all the purchases are piled up, duly labelled, and their prices attached. These are added up by the officials employed, and the foreign coin which is tendered taken by weight. There is no haggling in the first instance, or disputes afterwards; everything is managed with perfect order and system.

— p. 77.

(買う品物が決まるとすぐ、日本人の売り手は 1 枚の紙片とインクをつけた柔かい毛

筆を渡してくれる。この紙片に氏名と値段を書いてから、自分の名前をなるべく簡単にして日本人に言うと、その日本人は、自分の耳で聞きなれぬ声音から聞きとり得たかぎり原音に近いものを自国語で書く。その日の夕方一種の役所にゆくと、そこに買物が全部積まれていて、きちんと札がはってあり、値段もつけてある。これを係りの役人が総計して、出される外貨は目方で取られる。始めに値切ることもできなければ、あとで争いの起ることもない。すべては全く整然と組織的にとり行われる。)

The day following our arrival at Simoda, Lord Elgin received a visit from the Governor. He had learnt that we proposed going up the Bay of Yedo, and his object now was to exert all his powers of persuasion to induce Lord Elgin to forego this intention. He brought a large suite on board with him, all of whom seemed to appreciate an English luncheon. I was rather startled to hear one of them refuse Curaçoa, and ask for Maraschino instead. The Governor himself was a man of a most jovial temperament. He indulged in constant chuckles, and rather reminded one of Mr Weller, senior. He seemed to consider everything a capital joke—even Lord Elgin's positive refusal to comply with his request to hand over the yacht at Simoda and remain at that place. He used every possible argument to carry his point, but without avail. He said he dreaded the consequences to himself, and chuckled; still more did he dread the consequences to us, and chuckled again; and when at last he found that we were neither to be frightened or cajoled, he seemed perfectly contented, and proceeded to wrap up in square pieces of paper any articles of food which particularly struck his fancy, which he carried in the folds of his shirt, saying, as he did so, that he had a number of children at home of an age to appreciate the culinary curiosities of foreign parts. Many of his suite seemed to have families also, for they followed his example. I rather think one attempted to carry away some strawberry jam in his bosom, or in the sleeve of his coat, which was made full and baggy for that purpose. These square pieces of paper are not used exclusively for wrapping up food in; upon them inquisitive Japanese take notes, and in them they blow their noses.

— pp. 88—87.

(下田に到着の翌日、エルジン卿は奉行からの訪問を受けた。彼はわれわれが江戸湾を遡航するつもりだということを知ったので、彼の刻下の目的は、あらゆる説得力を発揮してエルジン卿にこの意図を放棄せしめるにあった。彼は多数の供びとを自分と同じ船に乗せて連れて来たが、それらの人は皆英国の午餐をうまくだべるらしかった。

一人がキュラソーをことわって代りにマラスキーノを求めるのを聞いて私はむしろ驚いた。奉行その人はこの上なく闊達な気質の人で、たえず笑い、ウェラー氏の父親〔註、ディケンズの小説 *Pickwick Papers* 中の人物〕を思わせるものがあつた。彼はあらゆることを素晴らしい冗談とみなすらしかった——エルジン卿が、下田でヨットを渡して同地にとどまってくれないかという彼の頼みに応諾し得ないきっぱりした拒絶さえも冗談にした。彼は自己の主張を通そうとして出来る限りの議論を用いたが無駄だった。彼は自分の身にふりかかる結果を恐れると言って笑った。それ以上にわれわれにふりかかる結果を恐れてまた笑った。そして結局、われわれに恐怖心を抱かせることも、なだめすかすこともできないと知ると、それでもすっかり満足したらしく、四角い紙に特に気に入った食品を包み始めた。そしてそれをシャツの折れ目に入れて持ち去りつつ、うちには外国の珍らしい料理をよこんでたべる年齢の子供たちがいると言つた。お供の者の多くも、同じく子持ちらしく、彼の例になつた。1人などは、苺ジャムを懐ろか上衣の袖に入れて持ち去ろうとしたように思う。その袖はこの目的のために大きく袋のようになっていた。この四角い紙は単に食物を包むためだけに使用されるものではない。これに詮索的な日本人はノートを取るし、またこれで彼らは鼻をかむ。

The Tycoon... has been exalted to so high a pitch of temporal dignity, that his lofty station has been robbed of all its substantial advantages, and he passes the life of a state prisoner, shut up in his magnificent citadel, except when he pays a state visit to Miako. It was a cruel satire upon this unhappy potentate to present him with a yacht; one might as well request the Pope's acceptance of a wife. There is indeed a practice which exists in Japan, and which may have extended to other countries, of doing improper things "nayboen," as it is called here; in other words, in a recognized incognito. Whether under this happy arrangement the Emperor sometimes slips out of his back-door, I was not informed; but it is certain that the nobles of the land avail themselves extensively of the latitude which it permits.

In a country governed by etiquette, and in which every individual is a slave to conventional rules of the most precise and rigid discription, it is necessary to have a loophole which enables them to sink to the level of ordinary mortals; in other words, to indulge their natural appetites for pleasure or vice. Under the convenient system of "nayboen," a noble may do anything which is not forbidden to the meanest subject. If the Emperor cannot take advantage of "nayboen" while he is alive, he can, as we afterwards discovered, die "nayboen." This is a common practice among grandees, their death being kept

secret until the next heir is firmly installed in the possession of the family dignity and honours.

— pp. 143—144

〔大君〔註、將軍〕は俗界の〔註、京都の天皇に対して「俗界の」という〕威厳のあまりの高さに祭り上げられてしまっているから、彼の高き地位のあらゆる実質的優利点は奪われて、京都へ公式訪問をする時以外は、壮大な城砦の中に閉じこめられた国家的囚人の生活を送っている。彼にヨットを贈るのはこの不幸な主権者に対する残酷な諷刺だった。法皇に妻をめとってくれないかと言うようなものだった。なるほど、日本に存在し、他の諸国にも及んでいるかも知れない、この国のいわゆる「内閣」で、すなわち、認められたる微行で、不適切なことをするというやり方があるにはある。この結構な制度の下で皇帝〔註、將軍のこと〕が時々、裏口からこっそり出てゆかれるかどうかは聞き洩らした。しかしこの国の貴族たちが、この制度によって許されるゆとりを広く利用していることは確実だ。礼儀作法に縛られ、あらゆる個人が最も正確にして融通の利かない因襲的規則の奴隷であるような国においては、普通の人間の水準まで降りてゆく、換言すれば、自然の快楽や悪徳への慾望を満たすための抜け穴があることが必要だ。「内閣」という便利な制度によって、貴族は、最も賤しい臣民に禁じられていないことまですることができ。將軍は生きているあいだこの「内閣」を利用できないとしても、われわれがあとで知ったごとく、「内閣」で死ぬことが出来る。これは高貴な人の間にはよくあることで、その死は次の継嗣がお家の威厳と名誉とを確実に握るに至るまでは秘密にして置かれるのである。〕

上記は、この年、日本暦の8月に將軍家定の死が発表になったことを諷した文である。この1858年という年は4月に伊井直弼が大老となり、ハリスとの間に、勅許を待たずに、条約に調印を断行した年である。また英国では東印度会社が廃止され、印度が英国の直轄領植民地となった年である。

江戸市内で乗組員たちがした買物の支払いが、江戸滞在の最終日に行われ、次のようなほお笑ましい情景が見られる。

Unfortunately all these had to be paid for. The settling of these formidable accounts loomed in prospect, all the more dreadful from the solemnity of the process. Two old Japanese, senior wranglers probably of their year, with corrugated foreheads and countenances betokening unlimited sagacity, stalked gravely in with attendants carrying balances, scales, weights, pens, ink, and paper, and seated themselves in the centre of the dining-room. Then approached tremblingly the shopkeeper and the victim who was to pay him. The latter had a strong presentiment that all the dollars in his possession, nay, even the entire amount of the handsome annual income he enjoyed, in consideration of the valuable services he was rendering his country in these

distant regions, would be insufficient to meet the terrific expenditure he had been induced to incur in this seductive city. Anxiously he emptied his bag of dollars into one scale of the balance. The silver itzibus in the other kicked the beam. Moment of intense relief! he remained the happy possessor of two dollars, having, it must be premised, previously borrowed as much from all his neighbours as they could possibly spare. There was very little discussion over the settlement. The officials came provided with an exact list furnished by the shopkeepers; they knew how much each of us owed the moment we gave our names. The amount had been added up.

— pp. 231—232

(不幸にしてこれらの物はみな値段を支払わねばならなかった。この大へんな勘定の決済は、待つ身には、操作の厳肅さからますます恐ろしいものに見えた。2人の老人の日本人、たぶん彼らの年度の数学学位試験優等者第一席という人たちだったのだろうが、皺の寄った額と顔に無限の知恵の深さを見せて、天秤、衡り、皿、重し、筆、墨、紙を従者たちに持たせておごそかにはいってくと食堂のまん中に席をとった。それから震えながら商人と、その商人に支払うべき犠牲者とが近づいて来た。後者は自己の所有するドル全部でも、否、これら僻遠の地でお国のために尽す貴重な奉仕にかんがみて、自分のもらっている少額ならぬ年収の全部をもってしても、この魅惑的な都市で招くに至った恐るべき出費に應ずるに不充分なのであろうという強い予感がするのだった。不安そうに彼はドル入れの中味を天秤の一方の皿にぶちまけた。他の方の皿の一分銀の挺子がぴんとはねあがった。無限の安堵の一瞬! 幸いにも彼はまだ2ドルを自分の手に残すことができた。しかし、これには前提があるので、彼は自分の隣人すべてから借りられるだけの金を前もって借りておいたのである。決済にはあまり談合は行われなかった。係官は商人の出した正確な表を持っていて、われわれが名を言った途端にもう各人の借金の額を知っていた。合計がすでにしてあった。)

5. オルコックの「大君の都」

Tycoon とは、幕府が条約文中に將軍を意味して用いた語で、そのためにこの書の表題に用いられた。「大君の都」とはもちろん江戸のことであるが、地方へも旅に出ないわけではない。英国の駐日初代公使 Sir Rutherford Alcock (1809—1897) が長崎へ到着したのは 1859 年 6 月 4 日で、江戸投錨 6 月 26 日、それから 1862 年 3 月 23 日に退去の乗船をするまでの 3 年間に、西洋人として最初の富士登山をし、箱根、熱海を訪れ、函館を視察し、長崎から江戸まで、幕吏が危険な情勢だから海路にしてくれというのを聞かずに陸上の旅をする。そして公使館(高輪の東禪寺)に帰り着く早々、攘夷派の浪士 14 名に襲撃され、館員に負傷者を出す。

編中われわれに興味ある記述は、上記の公使館襲撃事件と、桜田門の変と、これも兇刃に仆れた Hewsken の葬式の記事などである。

公使館にはいつからの始めのうちは無聊に苦しんで、Pepys の名も出てくる日記論などをやっているが、だんだん世相が險悪になるにつれて、筆者の筆鋒はややヒステリックになる。Oliphant の本に比べればもちろん、ペリーの遠征記などよりもずっと懐疑的反日的で、当時の日本の社会状態を、英国ならばアングロサクソン時代か、せいぜい Plantagenet 時代だと言っている。工芸品をのぞけば、ずっとおくれた未開野蠻の国だと見えた。

文体は、ちょうど P. G. Hamerton の *Intellectual Life* みたいで、一つの提言をするのに自明の理から始めることが多く、verbose で、くどい。そして、日記がもとになっていても、外交論やものごとの沿革の解説が可なりが多い。桜田門の変のくだりを、とびとびに引用しよう。

It was about ten o'clock in the morning of March 24, while a storm of alternate sleet and rain swept over the exposed road and open space—offering little inducement to mere idlers to be abroad,—that a train was seen to emerge from the gateway of the Gotairo's residence. The appearance of the *cortège* was sufficient to tell those familiar with Japanese habits and customs, that the Regent himself was in the midst,—on his way to the palace, where his daily duties called him.

— Vol. I, p. 349.

(3月24日の朝の10時ごろであった。みぞれと雨が交互に暴露された道路、広場に吹き荒れて、用のない者は外出しそうにもないとき、一つの行列が御大老の邸宅の門を出るのが見えた。行列の様子を見れば日本の習慣、慣例になれたものには、摂政〔大老〕自身がそのまん中にいる——日々の職務のために登城の途上にあるのだとはすぐに判った。)

The remnant of the Regent's people, released from their deadly struggle, turned to the norimon to see how it had fared with their master in the brief interval,—to find only a headless trunk! The bleeding trophy carried away was supposed to have been the head of the Gotairo himself, hacked off on the spot. But strangest of all these startling incidents, it is further related that *two* heads were found missing, and that which was seen in the fugitive's hand was only a lure to the pursuing party—while the true trophy had been secreted on the person of another, and was thus successfully carried off,

though the decoy paid the penalty of his life.

— pp. 351—352

(大老側の人々の生き残りは、死闘の手がすくと、この短いあいだに主君はどうなったかと、乗物の方に向かった。と、胴体に首がなかった！ 持ち去られた血のしたたる戦利品は、その場でぶった切られた御大老自身の首だったのだ。しかし、これら驚くべき事件のうちでも最もふしぎな事には、更に次のことが伝わっている。首級の見つからなかったのは2つであり、逃げる男の手に見られたのは追跡隊への誘いにすぎなかった。そして真の戦利品は別の男の身柄にかくされていた。こうして、囃（おとり）の方は命をおとしたけれども、首級はうまく持ち去られてしまった。)

The head of the Regent is to have been got safely out of Yeddo, and presented to the Prince their master, who spat upon it with maledictions, as the head of his greatest enemy. It was then carried to *Miaco*, the capital of the Mikado, and there exposed at a place of execution in that city especially destined for princes condemned to be executed—‘*Sidio onagawara*’ it is called, and over it was placed a placard ‘This is the head of a traitor who has violated the most sacred laws of Japan—those which forbid the admission of foreigners into the country.’ After two hours of exposure, the same intrepid followers are said to have brought it away; and in the night to have cast it over the wall into the court of Ikomono’s palace at Yeddo.

— p. 357.

(大老の首は無事に江戸を抜け出て、浪士らの主君である殿に提出されたと言われる。すると殿は最大の仇の首級だとして、罵言とともにそれに唾をかけた。それからミヤコ、すなわちミカドの首都に持ってゆかれ、そこで、この都会の死刑に処せられた大名用の仕置場——四条の河原と呼ばれるところに梟（さら）された。その上には「これは日本の最も神聖な法律——外国人の入国を禁ずる法律を破った叛逆者の首である」という高札が立てられた。梟すこと2時間にして、同じ不敵な家来たちは、それを持ち去り、夜なかに、江戸の掃部頭の邸宅の中庭へと堀越しに投げこんで行ったという。)

伊井直筋は、この本では *Ikomono-no-Kami* と書かれるのが普通の形である。

(本学教授)